

平成21年 5月27日現在

研究種目：基盤研究（B）（海外学術調査）

研究期間：2006～2008

課題番号：18401002

研究課題名（和文） EU統合に伴う中央ヨーロッパの都市再生プロセスとエスニック集団

研究課題名（英文） Relations between urban revitalization programs and ethnic communities under EU integration Process

研究代表者

加賀美 雅弘 (KAGAMI MASAHIRO)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：60185709

研究成果の概要：本研究は、中央ヨーロッパの大都市において近年進められている市街地を対象にした都市再生事業に伴う都市社会の変化の動向を明らかにするために、とりわけ外国人移民やロマなどのエスニック集団に着目し、彼らの生活行動や社会組織の変化と市街地再編事業との関係について検討した。その結果、EUからの補助を得た都市整備事業がエスニック集団のコミュニティ形成に一定の役割を果たす一方で、特に旧社会主義諸国においては急激な住宅整備事業によってエスニック集団の居住空間が変質するケースもあり、EU拡大とともに進行する行政主導の事業がエスニック集団の生活を大きく左右する実態を明らかにすることができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2007年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2008年度	3,000,000	900,000	3,900,000
年度			
年度			
総計	11,700,000	3,510,000	15,210,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：地理学・地理学

キーワード：都市再生事業，エスニック集団，外国人労働者，ロマ，コミュニティ，都市景観，中央ヨーロッパ

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降の中央ヨーロッパの都市における変化は、とりわけEU拡大と統合のプロセスにおいて激化している。特にEUの補助金を得た行政主導の都市再生事業が実施されることによって生活基盤や住宅などの改修や新築などが進められた結果、都市の景観や機能は大きく変化しつつある。

一方、これらの都市は外国人やロマの流入・定住化が顕在化している点においても共通している。彼らの多くはエスニック集団と

して都市内部の特定の地区に集住する傾向があり、固有の景観や社会組織を形成し、都市内部に独自の空間を形成している。

このように中央ヨーロッパの都市では、行政主導の都市構造の改変と、エスニック集団の集住化が同時進行しており、都市内部の格差や文化的多様性はダイナミックな変化を遂げつつある。

本研究は、変動しつつある中央ヨーロッパの都市に居住するエスニック集団の居住形態とその変化を多面的に検討するために、地

理学をはじめ、文化人類学や音楽民族学の専門研究者と学際的に検討することとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中央ヨーロッパの都市の再生事業において、エスニック集団が居住する地区がいかなる変化を遂げているかを明らかにし、都市の変化の動向を解明することにある。そのために具体的には、ベルリン(ドイツ)、ウィーン(オーストリア)、ブダペスト(ハンガリー)、ブラティスラヴァ(スロヴァキア)を主な研究対象とした。いずれの都市の研究においても、以下4つの研究課題を共通に設定することとした。

(1) 中央ヨーロッパの都市における景観整備事業と、それに伴う景観や機能の変化を解明すること

- ① 行政主導の整備事業の特徴を明らかにする
- ② 整備事業による機能・景観の変化を明らかにする

(2) エスニック集団の居住形態の特性を解明すること

- ① エスニック集団の居住形態の特性を明らかにする
- ② 集住地区における景観の特性を明らかにする

(3) エスニック集団の社会組織の特性を解明すること

- ① エスニック集団のコミュニティの特性を明らかにする
- ② 集団の生活行動様式の特性を明らかにする

(4) エスニック集団の居住地区の変化を解明すること

- ① 整備事業による居住形態の変化を明らかにする
- ② エスニック集団のコミュニティの変化を明らかにする

3. 研究の方法

都市整備事業とエスニック集団の関係の解明のために以下の4都市を選定し、研究者がそれぞれを分担して、現地での聞き取り調査と資料収集を中心にする作業を行った。

- ・ベルリン(ドイツ)
【森 明子】文化人類学
【中川聡史】ヨーロッパ地誌,
人口地理学
- ・ウィーン(オーストリア)
【川田 力】ヨーロッパ地誌,
社会地理学
- ・ブダペスト(ハンガリー)
【加賀美雅弘】ヨーロッパ地誌,
社会地理学
【横井雅子】音楽民族学

- ・ブラティスラヴァ(スロヴァキア)
【小林浩二】ヨーロッパ地誌,
農村地理学

また、海外共同研究者と連携して、情報収集の協力を得たほか、資料の共有や共同調査などを実施した。

4. 研究成果

研究方法に基づいて、研究者が分担して実施した成果は以下の通りである。

(1) ベルリンにおける都市社会とトルコ系住民に関する研究成果

【森 明子の担当分】

ベルリンにおけるトルコ系住民の生活と行動を検討するために、クロイツベルク区の東部地区を中心にした調査を実施した。20世紀初頭から低所得者が集住してきたこの地区は、冷戦時代にはその三方を「ベルリンの壁」によって囲まれ、大規模な再開発事業が計画されたために、1960年代後半から市民の転出と外国人労働者家族の集住を招き、貧困・失業・犯罪・麻薬など社会問題を抱える地区となった。その一方で、芸術家や学生、知識人なども含む市民による、さまざまな社会運動が展開した。

本研究では、1960年代後半から現在に至る歴史的展開を縦糸として、都市政策とそれに対する住民運動を民族史的研究として描く方法を採用し、政策議論に回収されない生活者のリアリティについて、トルコ系住民に商店において調査を行った。その結果、EU統合後の市民運動が、新しい社会運動の延長上に展開しているボトムアップの運動がトップダウンの統治政策との絡み合いとして展開する傾向にあることを指摘することができた。クロイツベルク区では、ボトムアップの運動が若者を中心とする一部の限られたグループのオルタナティブ運動として展開することが多かったが、EU統合後、街区のさまざまな局面において、エスニック集団出身の住民が参加した市民運動が展開されていること、エスニック・マイノリティ出身者とドイツ人住民の双方から構成される複数の運動グループが、相互に協力し合いながら新たなネットワークを編み出しつつ展開していることを明らかにすることができた。

(2) ウィーンにおける都市整備事業とエスニック集団に関する研究成果

【川田 力の担当分】

EUの拡大と統合に伴う都市の空間的位置づけの変化が、個々の都市の構造変容にいかなる影響をもたらすかを考察するために、近年のウィーン市の都市開発計画を分析し、その地域的課題を検討した。

その結果、ウィーン市では、EUの東方拡大に伴う都市環境層の激化に対応しつつ、中央ヨーロッパの中心都市としての地位をめざすという国家的政策により、ウィーン中央駅整備プロジェクトや旧アスパーン飛行場跡地開発などの大規模開発計画を含む積極的な開発事業が立案・実施されていることが明らかになった。

こうしたウィーン市の都市開発は、公共交通の利便性のさらなる向上や住宅整備などによって都市の魅力をより高め、生活の質に対する市民の評価を引き上げ、居住環境にこだわる知識労働者の集積をはかる一方、文化の多様性を保障することにより、多様な外国人労働者を吸引することを目途としているものとみることができる。しかし、こうした都市間競争への対応の過程において、中央ヨーロッパにおけるウィーン市の中心性を向上させる可能性を有する一方で、都市内部の地区間競争を激化させる可能性も指摘することができるであろう。

(3) ブダペストにおけるロマと都市整備事業に関する研究成果

【加賀美雅弘の担当分】

政治改革以後、比較的順調な経済発展を遂げてきたブダペストでは、行政や経済の中心地としての市街地の整備を目的にした都市の再生事業が活発化している。その一方で市内には多くのロマが集住する地区があり、彼らの生活環境の改善と社会経済的地域の向上が大きな課題になっている。そこで整備事業の実態と、ロマの居住形態及び彼らの社会経済的特性について、ブダペスト全域と彼らの集住地区 Józsefváros 区という異なるスケールで検討した。

まずブダペスト全域において、中心市街地とその周辺におけるすべての住宅の質的水準をその概観に基づいて調査し、明確な空間的な格差を明らかにした。また、国政調査結果を用いて住民の社会経済的水準の地域的な差異を明示し、住宅の質の低い地区にロマが多く居住する点も指摘された。

住宅の質と、住民の社会的経済的水準の対応は、Józsefváros 区においてより詳細な現地調査により明らかになった。この区には老朽化した住宅が多く残されており、所得水準や教育水準の低いロマが集住している。そこで2000年以降、行政主導の都市再生事業が積極的に実施されており、住宅の改修や道路などの生活基盤の整備が進められている。また、その際、住民の間にすでに一定のコミュニティが構築されていること、現存の建物を撤去するクリアランス型の再開発事業によりロマの転出をもたらし、彼らの転入先に新たな問題が生じる可能性があることなどから、建物を撤去しない改修事業が進められて

いる。さらに、これと平行してコミュニティセンターや学校、公園の整備も行われており、地域コミュニティの強化や地区の安全・防犯に向けた情報交換の促進、企業集団の形成なども期待されている。

ロマが居住する地区では、生活環境や住民の生活水準の低下など一連の「悪循環」のプロセスが生じるが、行政主導の再生事業によって、コミュニティを維持したままでの改善が徐々に進められつつある。以上から、ロマ集住地区の変容プロセスを描き出すことができた。

(4) ハンガリーおよびスロヴァキアにおけるロマに関する研究成果

【横井雅子の担当分】

EUに加盟した中央ヨーロッパ諸国においてロマが自らの拠り所としての文化を伝承し、かつそれを外部に向かってアピールする様子を、音楽を中心にして多面的に検討した。

ハンガリーでは、指導的立場にあるロマ音楽家や音楽関係者、ロマの子弟のための教育機関での調査により、音楽活動を通して発言力や財力を有するロマが存在している。それにより、ハンガリーにおいてはロマの利益確保に向けた行政の活動を高まっており、FMラジオ局の創設やロマ文化全般を概観できるマルチメディア・ソフトの製作も可能になっている。

ハンガリーにおいてロマが成功するほとんど唯一の可能性とされる音楽は、彼らの地位や名声を高めることにつながり、それゆえに舞踊や絵画と同様、彼らの文化として伝承されることが期待されている。一方、ハンガリーの音楽文化を代表してきたジプシー楽団は、社会の変化とともに衰退の一途をたどった。近年では若い演奏者による新しいアンサンブルも結成されるなど、ロマの音楽は再評価されつつある。

一方、スロヴァキアにおいては、ロマの音楽活動に関する調査はこれまできわめて少なく、それゆえに都市部の調査と平行して4箇所の町村でロマの音楽活動を調査した。その結果、ロマの音楽や言語など彼らの文化が地域にきわめて多様であることを確認した。また、東部の中心都市コシツェでは、体制転換後の1992年に開設されたロマ劇場「ロマトン」とロマのための芸術中等学校において、ロマ音楽・文化活動が積極的になされており、ロマ文化の伝承と発信が開始されている実態を明らかにすることができた。

(5) ブラティスラヴァにおける都市整備事業とエスニック集団に関する研究成果

【小林浩二の担当分】

ブラティスラヴァにおける調査・分析の結果は、以下2点にまとめることができる。

まず第1に、中央ヨーロッパの都市再生・発展に関する研究において、①ビジネス、金融、小売・サービス業を有する中心地が形成されていること、②これに加えて、レジャー施設や公共施設、ホテルや住宅などの複合的な機能を有する中心地が形成されたこと、③新たに住宅地が形成されていること、④交通網が整備されていること、などを指摘することができた。そして、特に住宅地の特徴を明らかにするためにブラティスラヴァ周辺部に位置する3つの住宅地において住民を対象にしたアンケート調査を実施した。その結果、住民がきわめて富裕であること、住宅に対する満足度が高いこと、通勤や買い物などでブラティスラヴァとの結びつきが強いこと、地域コミュニティが十分に形成されていないことなどが明らかになった。

次に第2の点として、エスニック集団として特にロマに関する調査を行った。その結果、スロヴァキアにおいてはロマの人口の増加傾向が著しいこと、ロマは国内東部地域に偏在すること、スロヴァキア社会においてロマに対する偏見が依然として強いこと、それゆえにロマがスロヴァキア社会に融合することがきわめて困難であることなどが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計16件)

- ① 加賀美雅弘、旅行ガイドブックに描かれたベルリンの景観—ベデカー『ドイツ帝国』の記述からの考察、東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ、60巻、2009、59頁～72頁、査読無し
- ② 小林浩二、スロヴァキアの首都、ブラティスラヴァの変化と特色、岐阜大学教育学部研究報告人文科学、57巻1号、2009、27頁～40頁
- ③ 森 明子、ドイツの民俗学と文化人類学、国立民族学博物館研究報告、33巻3号、2009、397頁～420頁、査読無し
- ④ 森 明子、外国人労働者の定住化—ベルリンにおける世代交代の事例から、国立民族学博物館調査報告、83号、2009、15頁～28頁、査読無し
- ⑤ 横井雅子、ジプシー楽団のふるさとで、あんさんぶる、496号、2009、20頁～21頁、査読無し
- ⑥ 川田 力、ウィーン都市開発計画 2005の特色と地域的課題、日本都市学会年報、42巻、2009、印刷中、査読有り
- ⑦ 加賀美雅弘、地理資料：観光で読むヨーロッパの地域構造、新地理、56巻2号、2008、27頁～31頁、査読有り

- ⑧ 加賀美雅弘、中央ヨーロッパにおける都市景観の意義—ブダペストの旅行ガイドを用いた考察、東京学芸大学紀要人文科学系Ⅱ、59巻、2008、39頁～58頁、査読無し
- ⑨ 小林浩二、ブルガリアの首都、ソフィアの発展と地域的特色、岐阜大学教育学部研究報告人文科学、56巻2号、2008、31頁～44頁、査読無し
- ⑩ 小林浩二、東欧における大都市の変化と特色、地理と歴史(地理の研究)、613号、2008、30頁～38頁、査読無し
- ⑪ 小林浩二、ブルガリアの首都ソフィアの発展と地域的特色、岐阜大学教育学部研究報告人文科学、56巻2号、2008、31頁～44頁、査読無し
- ⑫ 森 明子、特集 接合と連帯の人類学—ソーシャルなるものとは何か、民博通信(国立民族学博物館)、121号、2008、1頁～5頁、査読無し
- ⑬ 横井雅子、消えゆく楽師たち、あんさんぶる、490号、2008、20頁～21頁、査読無し
- ⑭ 加賀美雅弘、中欧都市ウィーン市街地の景観形成と再生に関する予察、東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ、58巻、2007、11頁～20頁、査読無し
- ⑮ 森 明子、町のつながりをつくる—ベルリンのスープ・フェスティヴァル、洗濯の科学、52巻3号、2007、51頁～55頁、査読無し
- ⑯ 小林浩二、東ヨーロッパにおける農業の変化と農村問題、地理月報、492号、2006、1頁～5頁、査読無し

[学会発表] (計12件)

- ① 加賀美雅弘、Kovács, Zoltán, ハンガリー・ブダペストにおけるインナーシティの持続性—Józsefváros地区の事例、日本地理学会春季学術大会、2009. 3. 29、帝京大学
- ② 加賀美雅弘、Kovács, Zoltán, ハンガリー・ブダペストのロマ集住地区における都市再生事業—Józsefváros区Magdolna街の事例、日本地理学会 2008年春季学術大会、2008. 3. 30、獨協大学
- ③ 小林浩二、スロヴァキアの首都、ブラティスラヴァの変化と特色、日本地理学会 2008年春季学術大会、2008. 3. 30、獨協大学
- ④ 横井雅子、ラウンドテーブル：現代に棲処を得る—伝統芸能の“再文脈化”、日本音楽学会第59回全国大会、2008. 10. 26、国立音楽大学
- ⑤ 川田 力、ウィーン市の都市計画、日本都市学会第55回大会、2008. 10. 25、神戸国際会館

- ⑥ 川田 力, ウィーン ブルンネン地区における都市再生と住民参加, 日本地理学会 2008 年春季学術大会, 2008. 3. 30, 獨協大学
- ⑦ 森 明子, 『共同体の物語』とフィクション, 京都大学人文科学研究所共同研究会「虚構と擬制」研究班, 2007. 11. 19, 京都大学
- ⑧ 森 明子, シングルという視点への試み—農村の「間借り人」の交換関係を考える, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所プロジェクト研究会「シングルと社会」, 2007. 7. 14, 東京外国語大学
- ⑨ 森 明子, ドイツの民俗学と文化人類学, 文化人類学会近畿地区研究懇談会「世界の人類学Ⅱ」, 2007. 7. 7, 千里ライフサイエンスセンター
- ⑩ Nakagawa, Satoshi, International migration from/to Thailand, The 17th Biennial General Conference of the AASSREC, 2007. 9. 29, 名古屋大学
- ⑪ Nakagawa, Satoshi and Yongvanit, Sekon, International marriage migration from rural Thailand to Germany, The 4th International Conference on Population Geographies, 2007. 7. 12, 香港中文大学
- ⑫ 川田 力, ウィーン市における商業地域構造, 2007 年人文地理学会大会研究発表, 2007. 11. 18, 関西学院大学

〔図書〕(計 4 件)

- ① 小林浩二, 二宮書店, 激動するスロヴァキアと日本—家族・暮らし・人口, 2008, 175 頁
- ② 加賀美雅弘, 木村 汎編, 朝倉書店, 東ヨーロッパ・ロシア (朝倉世界地理講座 10), 2007, 423 頁
- ③ 小林浩二, ナカニシヤ出版, 実践 地理教育の課題—魅力ある授業をめざして, 2007, 262 頁
- ④ 小林浩二, 呉羽正昭編, 原書房, EU 拡大と新しいヨーロッパ, 2007, 197 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加賀美 雅弘 (KAGAMI MASAHIRO)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号: 6 0 1 8 5 7 0 9

(2) 研究分担者

小林 浩二 (KOBAYASHI KOJI)
岐阜大学・教育学部・教授
研究者番号: 3 0 1 1 1 7 9 3

森 明子 (MORI AKIKO)
国立民族学博物館・教授
研究者番号: 0 0 2 0 2 3 5 9

横井 雅子 (YOKOI MASAKO)
国立音楽大学・音楽学部・准教授
研究者番号: 0 0 3 8 3 6 8 8

中川 聡史 (NAKAGAWA SATOSHI)
神戸大学・経済学研究科・准教授
研究者番号: 1 0 3 1 4 4 6 0

川田 力 (KAWATA TSUTOMU)
岡山大学・教育学部・准教授
研究者番号: 3 0 2 6 3 6 4 3

(3) 海外共同研究者

Meusburger, Peter
ドイツ・ハイデルベルク大学教授

Wiesner, Reinhard
ドイツ・ライプツィヒ大学教授

Scott, James
ドイツ・ベルリン自由大学講師

Fassmann, Heinz
オーストリア・科学アカデミー主任教授

Kocsis, Károly
ハンガリー・ミシュコルツ大学教授

Kovács, Zoltán
ハンガリー・セゲド大学教授